まれて殆んど未整理の狀態に置かれてあることを私共は周く知つてゐる。康熙實錄の凡例一條には、奏書、詔勅、上諭は全錄するとあるが、これは果して事實だらうか。私は乾隆實錄凡例一條に「欽定各種書籍皆書」とあるにも拘はらず、脱漏するものゝ二三ならずあるに氣付いた。

だが然し、矢張りこの實錄が清朝史研究の根幹であることに些さかの搖ぎもないであらう。清朝實錄の抄錄でしかない東華錄が斷然清朝史研究の主流を占め來たつた否み得ない事實は、今新たに清朝實錄が一大主流を形成するに至るものであることを語るに他ならない。實錄のによる研究の必要を痛感し乍らも、それが全く特殊な場所に藏置せられてゐるといふ故障の故に、北京、奉天在住の學者すら、尙東華錄の使用を以て滿足してゐなければならなかつた現在迄の狀態である。景印實錄の刊行普及は清朝史研究の一大躍進を約束するものだ。私共は心からこの康德東華錄の出現を悅びあはう。（今西春秋）

史學論叢

—京城帝國大學文學會論纂　第七輯—

昭和十三年三月發行、菊版
五二一頁　價三圓八十錢

京城帝大法文學部に於ける諸教授のたゆまざる研鑽の結晶として、今年も亦我々はこの論集を手にすることを得た。執筆者諸氏の潑溂たる意氣に對して先づ敬意を表さなければならない。

その內容は

朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟　藤田亮策
新羅上古世系考　末松保和
清朝文化東漸史上に於ける李月汀と金阮堂　藤塚鄰
三階某禪師行狀始末に就いて　大谷勝眞
渤海東京考　鳥山喜一
宋代水利田の一特異相　玉井是博
ベルギー國中立制定の史的考察（一八三〇—三九）　金子光介

の七篇より成つてゐる。左に簡單に紹介を試みよう。

『朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟』　近時朝鮮清川江、大

同江及び鴨綠江の上流地方卽ち平安南北道奥地の山間より夥しく發見せられた明刀錢に關する精密な報告で、挿入の圖版も二十五の多きに上つてゐる。特に吾人の興味を惹くのは、「明刀錢の地理的分布」なる最後の一章で、明刀錢の支那に於ける發見の場處がすべて戰國の燕國內に屬し、又燕に最も近く或は其屬領たりしかと思はれる遼東、熱河等にも多いことは、これを燕の貨幣と推定する先輩の說を保持するものであるとなし、史記始皇本紀・太史公自序・朝鮮傳・三國志魏志韓傳所引魏略等の記載によつて燕の東方に對する關係を窺ひ、燕が遼東を服屬し、眞番朝鮮等の地をも勢力範圍となし、略々浿水卽ち鴨綠江を以て境界となしてゐたことを推定し、燕人が戰國末の動亂に引續き秦の燕趙討滅、漢初の變動等によつて東方に移動した事實を考ふれば、北支、熱河、遼東より朝鮮北部にかけての明刀錢の分布は極めてよく了解出來るといひ、朝鮮に於て明刀錢が淸川、大同、鴨綠三大河口地方には發見せられず、かへつて上中流地方に發見せられたといふ事實の解釋に資してゐる。

『新羅上古世系考』　本篇に於て取扱ふ上古とは三國遺事に所謂上古、卽ち始祖より智證王に至る二十二代五百七十年のことで、この上古に關する所傳、記載の再檢討が著者の目的である。新羅上古の二十二王の姓は、朴、昔、金三姓で、王位は大體朴氏より昔氏へ、昔氏より金氏へ移り、王代數の割當は七、八、七となる。然るにこの三姓の始祖傳說を、出自の形式、出自・世生の場處等に就て比較すると、朴、金二氏は相通じたものをもち、昔氏のそれのみがやゝ對立的な特色をもつ。卽ち三姓始祖の傳說の內容は、三元的でなく二元的である。がこの三始祖傳說を通じた特色は、新羅の王は決して第一次的な存在でなく、初めに六部の長があつて、それによつて王は見出されたといふことで、三姓の王よりも六部の方がより根原的であるといふことである。ではこの三姓交立は、如何解釋すべきかといふに、金氏の王位の確立した中古に於ける新羅の貴族制たる六部がこの傳說の基礎的事實であると推測する。それは新羅の王位は六村六部に先行しないといふ、上古を構成する主なる內容に氣付いたからであ

る。六部の六といふ數字の基本的觀念は三である。金氏の王位の確立した中古の時代は、王位を主として見れば金氏一元的の時代であるが、社會的組織からいへば六部の貴族制時代である。この一元的王位と六部の貴族制との關聯を合理化する爲めに、金氏を含めた三姓の王系を中間に假設したものではあるまいか。上古の世系として三姓を設けたのは現實の新羅國、現實の新羅社會の前相を描かんが爲めの方法であらう。金氏は中古の王族の表徵、朴氏は中古の王妃族のそれ、昔氏は、金、朴以外のもの、金、朴二氏に對立するもの、并びにそれに附隨する諸々の傳說を總合した表徵で、三の數を充すために金、朴二氏に加へられたものではあるまいか。三姓は姓の要素によつてつながれる六姓の前相とするよりも、六に對する三といふ全く數字上、觀念上の所產として考へるのが妥當であらうと、明快な斷定を與へた。

次に二十二王の名の意義を逐次考究した結果、太陽の屬性に歸する光、明、照といふ意味を示すものが特に目立つが、これは最もあり得る名があるといふに止まり、二十二王の名には古さよりもむしろ新しさを認めるといひ、更に二十二王の血緣、親緣關係を追求して、そこに王母、王妃の名前のみならず、その出自が數多く記されてゐることに注意し、又そこにあらはれる多くの女性の名の一致と、また一部王名と共通せるものゝあるを認め、これは傳說の素材の單一と貧弱とを物語るものであるが、それにも拘らず、それを種々に書きあらはして王妃、王母、王父、王妃の父、王母の父を傳へねばならなかつたのは、新羅王の身分について、その母、その妃及びそれらの出自が甚だ注意された中古以降の歷史事實の反映ではあるまいかと推測してゐる。著者は更に進んで王位の繼承をしらべ、そこに女婿關係による繼承を指摘し、これは女系的から男系的への過渡期の繼承を構成するに最も自然な手法であるとなし、最後に、餘說として始祖廟、また始祖降誕地に建てられた神宮の傳說を考へ、始祖はその名よりして女性と見られるが、始祖傳說では男性となつてゐるのは、男系的世系の構成時に當つて女性始祖を男性始祖の妃とするに至つたものであらうとした。

要之、新羅上古の世系は、それを組立てる部分的要素の古さは認められるが、組立ての手法は極めて新しく中古以降の歴史事實が借り用ゐられてゐる。新羅開國の傳說は、新羅生成でなく、新羅王出現の傳說である。從つて各始祖は常に何者かによつて見出されるといふ受身の立場に置かれ、第二次的のものである。これは新羅國成立の歴史が導いた極めて自然の結果であり、そこに半島に於ける漢民族の政治の影響が指摘し得られるとなしてゐる。著者の細心にして且大膽なる論述の態度こそは、かゝる種類の問題を取扱ふものゝ範とすべきものであらう。

『三階某禪師行狀始末に就いて』　ペリオ氏蒐集敦煌文書の一として巴里國立圖書館古文書室に收藏せられ、同室の敦煌蒐集古文書目錄には法琳別傳に類するものとして目錄されてゐたものを、著者は之を法琳法師別傳とは全然異るもので、三階教關係の文書であることを識別し、寫眞三葉によつてその體裁を示し、これが全文を發表紹介したもので、著者が之を三階教關係のものと見なすに至つた理由、この文書にあらはれる某禪師の行狀に就いても論及してゐる。學界に新しき資料を提供したものとして、その功を多としなければならない。

『渤海東京考』　從來問題となつてゐた渤海東京龍原府の位置を推測して間島省琿春縣の古土城（半拉城、八磊城、八連城）に之を擬し、その土城からの發掘品によつて立說の證左としたもので、本論に入る前に、渤海五京設置の時期、五京設定の思想的根據に就て述べ、東京龍原府を始め他の四京の位置に關する諸說を擧げて居り、恰も東京の位置比定を中心とする渤海史研究の回顧といつた形をなして居り、輕妙なる筆致は讀者をして倦むことを知らしめない。文獻の上よりするも、又遺蹟遺物の上から見るも、著者の推定は妥當であると思はれる。

『宋代水利田の一特異相』　宋代、水利田の一種として東南地方に出現して重大な社會問題を惹起した圍田、圩田、湖田、沙田、蘆場等に關する詳密な研究である。圍田は浙西路に、圩田は江東路淮西路に、湖田は浙東路に、沙田、蘆場は浙西路淮東路に存在したが、その

構造は大同小異で、何れも堤岸の類を以て水邊の濕地を圍んで內を田としたものであつた。これらの中には北宋の眞宗、仁宗頃から創められたものもあるが、その多くは徽宗の世から盛んに設置を見るに至り、南宋に入つて益々流行した。これらは性質上官有地たるべきものであるが、屢々豪家及び寺觀によつて非法侵占されて私有地となり、或は官より之を出賣して私有地とされ、又官有のものと雖もその多くは請佃の形式で豪家や寺觀によつて兼併された。又圍田や圩田や湖田には屢々莊園が設置せられ、管莊、監莊を置いて之が管理に當らしめた。これらが豪家や寺觀によつて兼併せられた結果江湖陂塘の水利は獨占せられ、民田は水旱の災を被らざるを得なくなり、その害が社會問題として取扱はれるに至つたのである。朝廷は、大體に於て圍田及び湖田に對しては開掘を命じたが、圩田に對しては有害のものゝみ開掘又は改正を命じ、沙田蘆場に對しては單に納租を命ずるに止めた。しかしこの取締は充分に徹底すべきものではなかつたことを說く。この問題に關しては、さきに周藤吉之學士が「宋元時代の佃戶に就いて」(史學雜誌四四、一〇・一一)に於て一應論述してゐるが、著者は之を補ひつゝ、難解な宋會要や文集の類を縱橫に援用して堅實な論步を進めてゐる。著者自身もいつてゐる如く、本篇にはこの種の水利田が宋代に至つて俄かに發達した原因に就て論じて居ない。私は金の壓迫を被つて宋が淮水以南に退却せる以後は、人口の增加や財政の窮迫によつて荒地開拓の要に迫られたといふことにもこの問題を解く鍵が見出されるであらうといふ著者の推測に左袒し、著者がかゝる方面に關して精緻なる論考をものせられ、未開拓の狀態に殘されてゐる南宋時代の社會經濟史研究の分野に來耜を下されん事を望むものである(外山軍治)

歷代名畫記

小野勝年譯註

岩波文庫版　三九二頁　價六十錢

東洋史專攻小野勝年君の手で張彥遠撰歷代名畫記の邦譯が、岩波文庫版として出版せられたことは、最近の學界欣事である。歷代名畫記は晚唐會昌年間に書かれたもので、支那繪畫史研究のもつとも貴重な文獻であり、この書に次いで宋の郭若虛の圖畫見聞誌、鄧椿